



事例
2
金沢工業大学

学生から高い評価を得る 修学ポートフォリオとは

藤本元啓 金沢工業大学 学生部長 基礎教育部 修学基礎教育課程主任

各大学によって「初年次教育」の定義は異なるが、その学習内容は、①大学での学習スキル(レポート作成・プレゼンテーション・コンピュータリテラシーなど)、②補習教育(大学の専門分野で前提となる科目、とくに理工系大学では数学・物理)、③専門教育の基礎的知識、④大学生活における心構えや人間としての社会常識、以上4項目に大別される。

本学では他大学が教養部を廃止する中、2004年度に基礎教育部(修学基礎教育課程・外国語教育課程・工学基礎教育課程・工学基礎実技教育課程)を新設し、上記①～④をすべて実施している。それはユニバーサル化が進む大学教育と多様な学習履歴をもつ学生への対応こそ重要な問題と認識したからにはかならない。

本学の初年次教育は他大学と異なり、それぞれ独立した科目によって運営されていることに特徴がある。とくに①④については、修学基礎科目群(「修学基礎ⅠⅡⅢ」「進路ガイド基礎」「コアガイド」「技術者入門ⅠⅡⅢ」)として位置付けている。これらは「大学教育適応支援促進科目群」として人間力の育成を担うもので、本学の建学綱領の第一に掲げる「人

間形成」や経済産業省が示した「社会人基礎力」の実践に沿うものでもある。

本稿ではこの修学基礎科目群の中でも基幹科目として位置付けている「修学基礎ⅠⅡⅢ」を中心とした、本学初年次教育の実践事例を紹介しておきたい。

必修科目「修学基礎ⅠⅡⅢ」を修学アドバイザーが指導

1995年の第一次教育改革までは、米国大学の初年次教育制度を参考にした「フレッシュマンセミナー」(前・後期の通年開講、クラス担任制)と学習スキルを取り込んだ「図書館情報学」とを開講していた。改革において年間3学期制(1学年3期、通算12期)の Semester 制を採用するにあたり、これら2科目を「フレッシュマンセミナー」(1期、1単位)と「修学基礎能力演習」(1期、2単位)とに再編した。前者は入学直後のオリエンテーションとしての性格が強く、その内容の多くは現行の「修学基礎Ⅰ」に継承している。後者は学生が任意のテーマ(工学分野に限定されない)にもとづいて、論理的なりサーチペーパーの作成方法とプレゼンテーション手法を身に付

けるものであった。

しかし大学教育界における2006年問題・2007年問題を目前に控えた2002年において、多様な修学履歴・入試形態から入学する1年生の修学指導面における問題が目立つようになった。1期で身に付けたはずの修学・生活姿勢が、夏期休暇明けの2期になると失われがちになり、また学生と修学アドバイザー(クラス担任)との定期的な接触機会の喪失により修学指導が難しくなった。さらに「修学基礎能力演習」は学生が一定の知的水準を持つことを前提として構成されていたため、参考文献やインターネット上からの剽窃が著しく目立つようになるなど、所期の目的を達成することが困難になってきた。

そこで2004年度より両科目を通年の必修科目として再編したのが「修学基礎ⅠⅡⅢ」である。新入生がこれからの修学・生活の目標と技術者としての心構えを自覚できるようにするためには、また満足度や定着率を向上させるためにも、修学アドバイザーが修学・生活の両面を通年で指導すべきであると判断したのである。

修学ポートフォリオなど4つの学習内容を留意

本科目の学習目標は、①本学の学生として求められる、学習や生活に取り組む態度や方法を体験する、②自己実現を目指した自主的な学習計画を設計し、実行する姿勢を身に付ける、③活動と行動の基準や日本語表現能力を身に付けたうえで、それらを実践する、以上3項目である。「人間力教育、すなわち「社会に適合できる能力」教育を一通り体験する「体験型科目」といえよう。

その内容は多彩で、第一に自学自習の姿勢および生活スタイルを確立し、あわせて自己管理能力を高めるために修学ポートフォリオ(「1週間の行動履歴」「各学期の達成度自己評価」「各学年の達成度評価ポートフォリオレポート」)を作成する。第二に学長・学生部長・教務部長・進路部長による講話、修学アドバイザーによる講義・演習(グループ討議、プレゼンテーション)日本語表現(レポート・プレゼンテーション・小論文コンテスト)など、本学の各種授業スタイルを一通り体験し、その基礎力を養う。第三に、課外活動(キャンパスラリー、LC(ライブラリー・センター:図書館)ツアー、グループ企画(バーベキューパーティー)、研究室訪問、グループ発表のために放課後に追加して行うグループ活動など)によってチームワーク・プレ

ゼンテーション能力を育成する。これら3分野を通して量的な日本語表現方法(レポート作成)を体験する。そして第四に個人面談の実施である。

このように本科目は特定の学習スキル修得に特化したものではない。学生にとっては主体性をもった人物に育つための準備作業であり、自己の夢や目的にむけて自らキャンパスライフの設計ができる能力(目的指向型学習スタイル・自己管理能力)を養うことになる。また修学アドバイザーは1年間を通じた学生指導(修学と生活)に力点を置き、学生の「自立と自律」を促しつつ、修学意欲を向上させることが求められる。そのため欠席が目立つ学生や生活上問題が見られる学生には繰り返し指導を行い、提出物には十分眼を通し可能な限り添削を施し、コメントを付記した上で、すべて返却することになっている。

なお本科目は主として人文社会科学および生涯スポーツ系の教員が担当しているが、学科カリキュラム編成上、1クラスの学生数は50～80名と多く、その負担は大きい。とくに開講当初、次項で述べる「修学ポートフォリオ」そのものに対する理解不足と、学生との往復作業負担が過重であるとの批判が多かった。しかし本学に入学してくる学生の修学状況や「大学生活における心構えや人間としての社会常識」の体得がこれからは不可欠であることへの共通理解のもと、いまや積極的かつ組織的な運営が実践されている。

修学ポートフォリオはweb上で作成

本科目の教育手段としての特異性は、「修学ポートフォリオ(Web)」を活用した「1週間の行動履歴」「各学期の達成度自己評価」、および「各学年の達成度評価ポートフォリオレポート」の作成にある。

「1週間の行動履歴」(図1)は、毎日、①欠席・遅刻科目とその理由、②自習内容と所要時間数、③課外活動(利用し

図1 1週間の行動履歴

日	欠席・遅刻科目・理由	自習内容・所要時間	課外活動
5/9 日			
5/10 月		工学基礎ローイング講義 17:00～22:30	
5/11 火		図書館情報学 17:00～22:30	
5/12 水		数理工学・大講・P&S 17:00～22:30	
5/13 木		2号館前図書・図書委員会 14:00～17:00	
5/14 金		2号館前図書・コンピュータ基礎実習・情報科 11:30～12:40 14:10～17:00～22:00	
5/15 土		14:10～17:00～22:00	

た教育施設、クラブ活動、ボランティア、アルバイト、それらの時間帯など)、および1週間を通した満足・反省点(200文字程度)の4項目を入力するもので、自学自習の姿勢を身に付けるとともに生活スタイルを確立し、自己の目的指向を高めることを目的としたものである。学生はこれを毎週担当教員に提出し、教員はコメントを付けて翌週に返却する。

「各学期の達成度自己評価」(図2)は、各学期末に①「学生の行動目標(学期により5~6項目)」の達成度(0~100%)とその理由(各100文字)、②全履修科目の修学状況(成績、課題提出、出席など)の反省やその改善方法(300文字)、③日常生活状況全般(課外活動、アルバイト、病気・怪我等)について満足していること、感想、反省やその改善方法(300文字)などを作成し提出するものである。なお「各学年の達成度評価ポートフォリオレポート」については後述する。

この「修学ポートフォリオ」は学生がWeb上に入力する、いわば第二の学籍簿である。これに1年間取り組むことによって、第一に学生は修学・生活の自己評価と担当教員のアドバイスによって自己管理能力を身に付け、結果として「いま何を省き、何に取り組むべきか」を考えることになる。第二に学生と教員との距離が一層近くなり、さらに全員個人面談の実施をもとにうため、コミュニケーションが深まるとともに修学指導を要する学生の早期発見も可能である。第三に保護者面談における教員側の手元資料としても活用できる。第四に自己表現力が苦手な学生にとって、短文ではあっても繰り返し自己点検としての文章作成を続け、それに教員のコメントや添削が施されることによって、その能力の向上が期待で

図2 1期の達成度自己評価

1期の達成度自己評価	更新
クラス名: 1A12-1 氏名: 田中 太郎	
1)下記「修学基礎1」①~④の「学生の行動目標」の達成度(0%、20%、40%、60%、80%、100%)を選択し、その理由を各項目100文字程度で入力しなさい。	
①「1学期の行動目標」の達成を通して自己管理能力を高め、次学期での対応も文書で報告することができる。(%)	
80%	1)1学期の行動目標は毎日記述しており、自己管理能力はかなりの高水準に達した。また、次学期での対応も文書で報告できると思う。
②講義の内容を整理し、それに対する自己の見解も文章で作成することができる。(%)	
60%	講義の内容は整理できるようになったが、自己の見解を文章で作成することは、まだ苦手である。
③グループ討論を通して問題点を見出し、自己の見解を口頭および文章で表現することができる。(%)	
40%	グループ討論で問題点を見つけることはできるが、自分の意見をメンバーに伝えることが苦手である。

きる。しかし何よりも、学生が自分の夢や目標に近づくための自己認識・自己再発見となることを期待している。

なお4月中旬~5月上旬と1月下旬の年に2回、最低でも10分間程度の全員個人面談を実施し、教員は修学生活上の問題の有無を確かめ、その結果を「修学履歴情報システム」に入力しなければならない。学生の修学上の情報は、このシステムのもとで有機的に共有されており、修学上の問題の早期発見と即応が可能な体制が構築されている。これらの結果をもとに修学アドバイザーは、6月初旬の保護者会総会、7月下旬~10月下旬に開催される地区交流会(全国53会場)に臨み、1年次の保護者と緊密な関係を保っている。

なお進級した学生が旧修学アドバイザーとのコミュニケーションを継続して保ち、一部では上級生が新生を自主的に指導する「勉強会」を設けるという成果を生み出している。

学生の評価は高いが改善の余地も

本科目では授業アンケートを短時間で整理集計して早期にFD活動に資するためにWeb上(他科目はOMRシート)で実施し、その結果を学生に公開している。要望・苦情などの自由記述に対しては、修学基礎WGが各教員のコメントをまとめた形で回答する「フィードバックコメント・システム(全科目対象、Web)」を2005年度から導入している。

毎学期約1,700名を対象とした学生の授業評価を一部示したものが、表1「修学ポートフォリオの作成」、および表2「自学自習の姿勢」である。いずれも高い評価を得ており、多くの学生がその有益性を認めている。基本的には本科目の学習目標と「修学ポートフォリオ」作成の意義を理解しているものと判断できる。自己の行動を振り返り、次学期の行動に対する決意や改善する能力の育成は、自己実現に向かう学生への支援のひとつになるものと考えている。

修学アドバイザーに対する評価は、「親身で熱意ある指導」「理解できる厳しさ」など良好であったが、反面「堅苦しい」「指導の格差」「個人面談が短時間」「課題の未返却」など厳しい意見もあり、残念なことに修学アドバイザーの一部に本科目の位置付けと役割の理解が十分徹底されておらず、また講義手法にも改善の余地が残ることが判明している。

また各担当教員は授業アンケート結果にもとづいて各学期のFD報告書を作成し、修学基礎WGに提出する。WGは

表1 「行動履歴」や「回顧と展望」は自分を見つめ直し自己評価を行うものですが、あなたにとってこの作成は有益と考えますか。

		大変有益	有益	肯定率
04年	1期	—	—	—
	2期	6.2%	58.7%	64.9%
	3期	9.3%	68.5%	77.8%
05年	1期	19.0%	71.7%	90.7%
	2期	16.0%	70.3%	86.3%
	3期	18.0%	69.4%	87.4%
06年	1期	17.7%	72.4%	90.1%
	2期	13.7%	64.5%	78.2%
	3期	20.7%	68.1%	88.8%

※2004年1期はこの設問を実施していない。

表2 自学自習の姿勢は身に付きましたか。

	1.十分身に付いた	2.やや身に付いた	3.あまり身に付かなかった	4.まったく身に付かなかった	回答者数
04年 1期	12.7%	67.2%	17.5%	2.6%	1,404名
	9.4%	59.9%	25.6%	5.0%	1,156名
	19.4%	60.6%	15.1%	5.0%	1,007名
05年 1期	26.8%	58.4%	11.9%	3.0%	1,341名
	15.5%	65.9%	16.3%	2.3%	1,321名
	24.4%	61.6%	11.7%	2.3%	1,141名
06年 1期	23.6%	60.6%	13.5%	2.3%	1,528名
	15.4%	61.5%	20.3%	2.8%	1,301名
	23.0%	63.6%	10.7%	2.6%	1,284名

問題点を検討し改善策を加えて科目担当責任者に答申し、科目担当者会議で協議したうえで次学期および次年度に向けての改善事項を決定し、学習支援計画書(シラバス)を改訂する。科目担当責任者はさらに基礎教育部長および教育点検評価部委員会にこれらを報告して、PDCAサイクルを完成させ次年度に臨んでいる。その検討内容例を挙げておくと、①学生の成績、②行動目標と授業内容や課題・評価の整合性、③授業アンケートによる学生の授業評価内容、④日本語表現に関する時間数の拡大、⑤教員個人による自己点検・自己評価内容など多岐にわたる。

「KITポートフォリオシステム」につなげて運用

2007年4月段階で稼働している「KIT(Kanazawa Institute of Technology)ポートフォリオシステム」には、「修学ポートフォリオ」のほか「キャリアポートフォリオ」「工学設計ポートフォリオ」「自己評価レポートポートフォリオ」がある。今年度末からこれらを有機的に結合した「達成度評価ポートフォリオシステム」(文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)「学ぶ意欲を引き出すための教育実践-KITポートフォリオシステムを活用した目標づくり」)の運用を1~3年次全学生を対象として開始することになっている。

その具体的内容は、①今年度の目標と達成度自己評価、②今年度の修学・生活状況の反省、およびその改善方法(健康、出欠、成績、課題提出、利用した教育施設、課外活動、アルバイトなど)、③希望進路とその実現に向けて実際にとった行動・成果および展望(自学自習、資格挑戦・取得、インターンシップ、研究室選択など)、④「KIT人間力=社会に適合できる能力」に示された5つの能力の達成度自己評価(「自律と自立」「リーダーシップ」「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」「コラボレーション能力」の各項目について、具体的な達成度自己評価)、⑤次年度の目標とこれを達成するための行動予定(各学年設問項目が異なる)、以上5項目についてWeb上に入力する(各100~300文字)。これをもとに新学年の春、修学アドバイザーあるいは「工学設計Ⅲ」(卒業研究ゼミ)教員との個人面談において、新年度の計画を相互確認することになる。

すなわち、学生による目標の設定(Plan)、目標を達成させるための活動プロセスや成果の記録(Do)、集積した記録を基に自己評価することで目標への達成度を評価(Check)、次の改善を図る活動計画を作成し実行(Action)、というPDCAサイクルを学生自身が回し、教員がこれを支援するものである。上記の各ポートフォリオシステムの成果物をサマリー化し、これらを俯瞰して振り返ることにより、自己成長の軌跡と修学の自覚・自信・反省から、技術者になる意義と意欲を高めることを目的とするもので、本学ではこれを「KIT自己成長型教育プログラム ACROKNOWL PROGRAM」と称している。なおこの取組みについては、本学ホームページ <http://www.kanazawa-it.ac.jp/>を参照されたい。

徹底した実践が重要

多くの学生にとって大学は最後の教育機会の場であり、大学には入学を許可した学生を社会に貢献できる人物として送り出す使命がある。そのためには1年次の修学指導が重要であることは自明で、修学アドバイザーは学生の大学生活への適応を直接・間接的に支援し、上級学年に導かなければならず、その意味において教員の責務は重い。たとえに優れた教育改革プラン・教育プログラムを開発したとしても、大学組織の全構成員がその意味と意義を理解し、かつ徹底した実践がともなわなければ、それは改革のための改革に終わってしまう。